

【エッセイ】

ASEAN 研究余滴 ② — ASEAN における公用語の問題

黒柳 米司

周知のごとく、ASEAN 創設以来、公用語は英語である。シンガポールの外交官であった論客キショール・マブバニは、近著『ASEAN の奇跡』においてこの事実を ASEAN の長所と指摘し、EU が主権平等原則を厳守するシンボリックな制度として加盟諸国 24 ヶ国語を公用語としており、これが実務的に膨大なエネルギーと 10 億ユーロもの予算を費消していることを揶揄している。

| 国 語 | 字 形 |
|--------|------------|
| ビルマ語 | မြန်မာဘာသာ |
| カンボジア語 | ភាសាខ្មែរ |
| ラオ語 | ພາສາລາວ |
| タイ語 | ภาษาไทย |
| ベトナム語 | Tiếng Việt |

ASEAN 各国語は、ブルネイ・インドネシア・マレーシアの 3 ヶ国ではローマ字表記の現地語（マレー/インドネシア語、およびピリピノ語）が常用され、シンガポールは英語・マレー語・タミール語および漢字と英語が公用語とされ、その他 5 ヶ国語は左表に示すように、非アルファベット文字で標準表記されている。これを ASEAN 公用語として採用すれば、事務上・コミュニケーション上、侮りがたい障害となることが推測される。

その意味でキショールの指摘は正論ではあるが、「バイリンガル」を慣いとするシンガポール人が陥りがちな盲点を忘れた論議といえなくもない。つまり、非英語圏加盟国（とりわけ、人口において全 ASEAN のほぼ半

数を占めるマレー語系 3 国）の語られざる不満である。

実際、域内大国インドネシアには従来から、経済的に群を抜いて豊かな華人系国家シンガポールへの根深い反感が定着している。かつてハビビ大統領は、対インドネシア支援に消極的なシンガポールについて、「あのちっぽけな赤い粒」と揶揄したことがあるし、イスラム指導者たるワヒド大統領も記者会見で「シンガポール人はマレー人を軽蔑している」と憤懣を爆発させ、「この際、（法典コーランの用語たる）アラビア語を ASEAN の公用語にしてみるか？」とさえ論じたことがある。さすがにこれほどの暴論には、与党闘争民主党事務局長さえ「かれのコメントを額面通りに受け止めないで」と火消しに回っている。

しかも、マレー/インドネシア語を ASEAN の公用語に位置づけようとする機運は一過性のものではなく、21 世紀に入ってからも、2011 年にはインドネシアが「ASEAN 政府間委員会」(AIPA) でインドネシア語を公用語とするよう提案したことがある。さらに 2017 年にはマレーシアのラザク首相がマレー語を ASEAN の公用語 (bahasa resmi di ASEAN) とするよう提案し、2020 年に入ってもインドネシアのナディム・マカリム教育相がインドネシア語を「東南アジア共通語」(lingua franca Asia Tenggara) とする提案を行なっている (Kompas, 2020/02/20)。

こうした論議は、時に我が国内でも注目され報道されるが、この際、ASEANの「公用語」と表現されるが、ASEAN域内では微妙に異なる表記がもちいられていることを見落としてはなるまい。実際、2008年に発効した「ASEAN憲章」は、その第34条で、"The working language of ASEAN shall be English."と規定している。*official language*でなく *working language* である。明らかに非英語諸国への忖度が働いていたと見るべきであろう。

確かにマレー/インドネシア語を話す人口は（ブルネイ・インドネシア・マレーシアを合算して）ASEANのほぼ半数を占める。とはいえ、これを英語と並ぶASEAN公用語とすれば、他の加盟国が自国語を同格に押し上げようという衝動にかられても無理はない。それは、新たなASEAN不協和音の追加要因とさえなりかねない。すでにエスタブリッシュされた共通語としての英語という伝統は軽々に破棄されてはなるまい。